

【九州大学芸術工学部 芸術工学科 音響設計コース】(2021年度以降入学者)

1) ディプロマ・ポリシー (学位授与方針)

教育の目的

現代社会において、音文化に対する深い理解を備え、音に対する正しい評価、人間に適合した音環境の創出、音響情報の高品質化の推進が可能な専門家が求められている。よって、音響設計コースでは、音に対する鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な音響設計能力を有する人材を養成し、次の教育目標を達成した者に学士(芸術工学)の学位を授与する。

- ・音に関連する芸術、科学、技術のすべての分野に関心を持ち、それらの専門的知識を自発的に習得して、自らの専門性を継続的に発展させる意欲を有する。
- ・音響設計の専門家として必要な音に対する感性と、音に関連する文化、環境、情報の各分野についての専門的知識を有する。
- ・音に関連する芸術、科学、技術的な側面と人間や社会との関わりを理解し、専門的知識を応用して総合的かつ実践的に課題を解決する能力を有する。

参照基準

- ・日本学術会議 分野別参照基準 -機械工学分野
- ・日本学術会議 分野別参照基準 -電気電子工学分野
- ・日本学術会議 分野別参照基準 -心理学分野
- ・The Quality Assurance Agency for Higher Education, Subject Benchmark Statements -Music を参照

到達目標

A. 主体的な学び・協働

- A-1. (主体的な学び) 歴史、思想、芸術などあらゆる分野に関心を持ち、それらの知識を自発的に習得し、自ら問題を見出して、創造的・批判的に吟味・検討することができる。
- A-2. (協働) 多様な知の交流を行い、他者と協働し問題解決にあたることができる。
- A-3. 文章表現能力、発表能力、及び討議力を持って広く世界と交流し、効率的に情報を発信、吸収することができる。

B. 知識・理解

- B-1. 教養・専門基礎、リメディアルの3つを意識した科目を通して、知識を使える力を備えることができる。
- B-2. 芸術工学の基盤となる具体的知識や概念、考え方、方法について理解し、コースごとの専門にとどまらない普遍的なデザインのリテラシーを説明することができる。
- B-3-音響設計基礎. 音響設計の専門家として必要な音に対する感性を身につけるとともに、音の基礎を多角的に解釈することができる。
- B-3-音文化学. 音響設計の専門家として必要な音に対する感性を身につけるとともに、人間の精神活動と音の関係を理解し、かつ表現することができる。
- B-3-音響情報科学. 音響設計の専門家として必要な音に対する感性を身につけるとともに、聴覚、音声、音楽など、情報としての音の処理や伝送について理解することができる。
- B-3-音響環境工学. 音響設計の専門家として必要な音に対する感性を身につけるとともに、人間を取り巻く音を人間の側面あるいは物理的側面から分析、解釈することができる。

C. 能力

C-1. (適用・分析・統合)

C-1-国際. デザイン一般、及び専攻する分野の理論や知識、スキルを英語で学び、世界における先端的なデザイン活動に参画する準備を行う。

C-1-1. 課題解決のために、音に対する感性と、音文化学、音響環境工学、音響情報科学の各分野についての専門的知識を統合して、音を分析、解釈し、制御あるいは構成する能力を持っている。

C-2. (評価・創造)

C-2-1. 音に関連する幅広い知識に基づいた独創的な仮説を設定し、検証する、あるいは音を生成する能力を有する。

C-2-融合. 異分野との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を発見・提起し、解決することができる。

D. 実践

D-1. 音に関連する芸術、科学、技術的な側面と人間や社会との関わりを理解し、専門的知識を応用して総合的かつ実践的に、実社会に存在する課題を解決する能力を有する。

D-2. 音に対する鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、音の適正な評価、人間に適合した音環境の創出、音響情報の高品質化などを推進し、グローバルな世界で豊かな生活の実現に貢献することができる。

2) カリキュラム・ポリシー (教育課程編成方針)

ディプロマ・ポリシーを達成するために、以下の方針に基づき、別表(カリキュラム・マップ)の通り、教育課程を編成する。

まず、低年次において基礎科学やデザインリテラシーの授業とともに、音に関連する芸術、科学、技術の分野に関連する基礎科目を配置する。

一年次には、アクティブ・ラーニングを重視する科目(基幹教育セミナー、課題協学)、ICT国際社会に必要な能力の向上を目指す科目(サイバーセキュリティ基礎論)、教養としての言語運用能力習得と異文化理解を目指す科目(学術英語、初修外国語)、専攻教育につながる基礎的知識と様々な分野の思考法を学ぶ科目(文系ディシプリン、理系ディシプリン)、ライフスキルの向上を目指す科目(健康・スポーツ科学)などの基幹教育科目を通して、「A. 主体的な学び・協働」を中心に培う。二年次には、多様な知識の獲得と学びの深化を目指す科目(高年次基幹教育)や学術英語、デザインリテラシー科目などと共に、音文化学、音響環境工学、音響情報科学のすべての分野について、必修科目であるコース基礎科目を集中的に配置し、音響設計の専門家として必要な基礎知識を身につけさせる。さらに、コース演習科目も配置して、基礎知識の理解を深める。これらのことにより、主に「B. 知識・理解」を達成する。

その後、高年次には、音響設計の専門家として必要な、音に対する感性と音に関連する文化、環境、情報の各分野についての専門知識を習得、深化させ、さらにコースの専門科目やコースにまたがる横断的な科目の履修を通じて、総合的に課題を解決するために応用する能力を習得させる。

3年次以降は、音響設計の専門家として必要な音に対する感性と、音文化学、音響環境工学、音響情報科学の各分野の専門科目および専攻教育を通して英語力習得を目指す科目(専門英語)を配置し、音響設計の専門家としての専門知識を深化させる。さらに、コース演習科目も配置して、専門知識の理解を深める。これらのことにより、「B. 知識・理解」を達成する。

加えて、音響コース内の音文化学、音響環境工学、音響情報科学の分野にまたがる横断的な科目群、さらには音響コース以外の他コースにまたがる横断的な科目群を配置するとともに、3年次を通して音響実験を実施することで、音に関する専門知識を統合して、独創的な仮説を検証する能力や音を生成する能力、他者との協働により社会の複合的な課題を解決する能力を養成する。このことにより、「C-1. (適用・分析・統

合)」「C-2. (評価・創造)」を達成する。

4年次には、卒業研究およびインターンシップを実施することで、音に対する鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備えた、総合的な設計能力を身につけさせる。さらに、音に関連する芸術、科学、技術的な側面と人間や社会との関わりを理解し、専門的知識を応用して総合かつ実践的に、実社会に存在する課題を解決する能力を身につけさせる。このことにより、「D. 実践」を達成する。

【継続的なカリキュラム見直しの仕組み (内部質保証)】

カリキュラムは、三つの分節に区分して運用する。第1分節(1年～2年次)は、基盤的な学びの姿勢と知識・理解を習得する「導入・基礎」期、第2分節(3年次)は発展的な知識・理解およびその活用力を習得する「発展」期、第3分節(4年次)は知識・能力の統合と新しい知識の創出に取り組む「統合」期と位置づける。

当該分節の中で焦点化した到達目標の達成度は、それぞれの分節の終盤に、以下の方針(アセスメント・プラン)に基づいて評価し、その評価結果に基づいて、授業科目内の教授方法や授業科目の配置等の改善の必要がないかを、音響コースの検討WG(コース長、学務専門委員、科目担当者、クラス担任等で構成)において検討することで、教学マネジメントを推進する。

《アセスメント・プラン》

- ・「導入・基礎」期の評価：学生の成績評価を総合的に精査する。
- ・「発展」期の評価：重点科目を設定して、その中で当該分節の中で焦点化した学修目標の達成度を確認する。
- ・「統合」期の評価：学びの集大成としての卒業研究完成時に、指導教員を含む複数の教員が、学修目標の達成度を総合的に評価する。

3) アドミッション・ポリシー (入学者受け入れ方針)

求める学生像

国立大学法人九州大学では、本学教育憲章の理念と目的を達成するために、高等学校等における基礎的教科・科目の普遍的履修を基盤とし、大学における総合的な教養教育や専門基礎教育を受け、自ら学ぶ姿勢を身に付け、さらに進んで自ら問いを立て、創造的・批判的に吟味・検討し、他者と協働し、幅広い視野で問題解決にあたる力を持つアクティブ・ラーナーへと成長する学生を求めている。

加えて、音響設計コースでは、以下のような学生を求めている。

1. 音に関連する芸術、科学、技術の幅広い分野に関心を持ち、専門的知識を自発的に習得する強い意欲を有する。
2. 音響設計の専門家として必要な音に対する感性と、音に関連する文化、環境、情報の各分野についての専門的な知識を習得するための基礎学力を有する。
3. 音響・音楽などに関する強い関心や有意義な経験を持ち、芸術的感性を有して個性豊かであるとともに、音響設計コースにおいて自主的に修学する意欲を有する。

求める学生像と学力3要素との関係

- ① 知識・技能：高等学校等における基礎的教科・科目の履修を通して獲得される知識・技能。高等学校で履修する科目、特に、数学、物理、外国語の基礎知識を確実に習得していること。上記の求める学生像の2に対応している。
- ② 思考力・判断力・表現力等の能力：多面的に考え、客観的に批判し、自分の言葉で人に伝える資質。入学後の修学に必要な基礎学力に加えて、論理的な思考能力、数理的思考能力、問題解決能力、独創性、表現力を有していること。上記の求める学生像の3に対応している。

- ③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度：多様性を尊重する態度、異なる考えに共感する寛容性。音に関連する芸術、科学、技術の幅広い分野に関心。音響・音楽に関する様々な活動など、有意義で実践的な経験を有していること。音楽に関する芸術的感性を有していること。上記の求める学生像の1、3に対応している。

入学者選抜方法との関係

	①知識・技能	②思考力・判断力・表現力等の能力	③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度
一般選抜	大学入学共通テスト 個別学力検査	個別学力検査	
総合型選抜	調査書 大学入学共通テスト	小論文	調査書 個人面接

学修目標				1年生				2年生				3年生				4年生							
区分				1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q				
	B-1. 教養・専門基礎、リメディアルの3つを意識した科目を通して、知識を伝える力を備えることができる。									デザイン史													
				線形代数学I		線形代数学II		数理統計学															
				微積分学I		微積分学II																	
				力学基礎		電磁気学基礎																	
				力学基礎演習		電磁気学基礎演習																	
				情報科学		熱力学基礎																	
				サイバーセキュリティ基礎論		熱力学基礎演習																	
A. 主体的な学び・協働	A-3. 文章表現能力、発表能力、及び討議力を持って広く世界と交流し、効率的に情報を発信、吸収することができる。			言語文化科目（第二外国語Ⅰ）		言語文化科目（第二外国語Ⅱ）				専門英語													
				学術英語プロダクション1		学術英語プロダクション2		学術英語・集中演習															
				学術英語アカデミックイシューズ・学術英語グローバルイシューズ				学術英語・CALL1		学術英語・CALL2													
	A-2. (協働) 多様な知の交流を行い、他者と協働し問題解決にあたることができる。								高年次基幹教育科目														
						基幹教育セミナー	課題習得科目																
		健康・スポーツ科学演習																					
	A-1. (主体的な学び) 歴史、思想、芸術などあらゆる分野に関心を持ち、それらの知識を自発的に修得し、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討することができる。				文系ディシプリン科目		文系ディシプリン科目																
区分				1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q				
学修目標				1年生				2年生				3年生				4年生							
教育課程の時期区分				導入・基礎期								発展期				統合期							
アセスメント・プラン				達成度調査（専門力）その1								達成度調査（専門力）その2				卒業研究の審査【共通ルーブリック】							